

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 528 号 ] 2006 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.528  
June 2006

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 日本語で聴くカンタータの魅力

第 99 回定期演奏会 (5 月 13 日) を聴いて

一聴衆 (後援会員)

先ずおことわりしておかなければいけないのは、私は音楽好きの主婦にすぎず、クリスチャンでもないことです。ですから、元来はバッハや宗教音楽にとりわけ惹かれたというわけでもないのです。始めはいわば教養としてバッハを聴いておこうという気持でした。しかし、縁あって東京バッハ合唱団の演奏は、まだ小林道夫氏の指揮の頃から、おりおり拝聴することになりました。そういうわけで音楽に関しては専門的なことは何も言えませんが、ただ素直に感想を述べるだけでよいとのことなので、今回思い切って筆をとらせて頂きました。

...

これは 2,3 年前、しばらく間をおいて演奏会に伺ったおりに強く感じたことなのですが、合唱団の皆さんの声がとてもものびやかで、やさしく響いたのです。自然で押しつけがましさがないことに感心しました。近年新しく指揮に参加されたとうかがう橋本眞行氏の指揮ぶりも懇切丁寧でかつ端正であることとも関連があるのかも知れません。今回もカンタータ第 180 番、第 187 番の演奏にそれを感じました。ソリストの皆さんは、これは毎回のことですが、それぞれが実に見事な出来ばえで本当に素晴らしく、聴き応えがあります。全体に品位があり、聴衆も一体となって宗教音楽のもつ独特の広い世界に入ることができるように感じました。

そのように全員の心が自然に一つになるということには、やはり歌詞の日本語訳というものが大きな力になっていると思います。合唱団の主宰者である大村恵美子氏が若いときからバッハのカンタータの日本語訳による演奏に目標を定め、着々と地道な訳詞の作業にとり組み、並行して演奏を重ねてこられたのは実に素晴らしいことです。ご本人が健康に恵まれ、周囲の多くの方々との協力を得て今日に至ったことも幸運なことではないかと思えます。

...

休憩をはさんで第 194 番の大村氏の指揮による演奏が始まりました。私は今回からコンパクトになり持ちやすくなったプログラムを手にして演奏前に訳詞を集中して読むことができました。これはもちろん、以前からも感じていたことですが、改めてその見事な文語訳に感嘆の念を禁じ得ませんでした。これほどのこなれた文語訳ができる方は、

もうこれからの世代の人には望めないのではないかと感じました。

その指揮ぶりも、一語一語、苦心をされて訳出された方ならではの情熱が感じられ、迫力があります。まさに身も心も入っていると感じました。あえて指揮棒を使わず、その手指の先までしなやかな両手の動きは見ていても心地よく、かつ、おのずからなる説得力があります。散文の訳とは異なり、音楽にのせる歌詞の訳出は、そのご苦労もひとしおと思います。何回も繰り返されるフレーズの中に印象にのこる単語を選び、内容を正確につかんで簡潔かつ平明な言葉で大意を伝える技は並大抵のものではないと思います。言葉にたいする感性が求められます。これはもう天賦の才能としか言えません。

...

私は、実際のところ、第 194 番のコラールの ...心の炎 / わが終わりの日 / 港に入るまで / 保たしめたまえ のところで思わずぐっときてしまいました。冒頭でも申しましたように、私はクリスチャンではありません。しかし、仏教であれ日本古来の神道であれ、あるいは大いなる自然を前にして、謙虚な気持でひざまずく心は人類に普遍的なものではないかと思えます。「人間を超えた大いなる存在」に身をゆだねること、自分の意志で生きているのではなく、生かされていると感じること、これは確かにあります。ですから、西欧での長い伝統のあるキリスト教およびその宗教音楽に敬意を払うことにやぶさかではありません。

この世の間の中で心の内なる炎をぜひ私も終わりの日まで燃やし続けたいと念じます。このような感動を与えてくださったこの日の演奏に感謝します。また同時に『バッハ・カンタータ 50 曲選』を完結された大村氏に心からお祝いを申し上げます。何よりもご本人自身が大いなる喜びと達成感を味わっていただけることと拝察いたします。かつて小林氏の後を受けて指揮台に立つことをためらわれたこともあろうかがいました。多くの困難を乗り越えて、見事にご自身で指揮をされている姿を身近に拝見し、わが事のような喜びを実感させていただいた夕べでした。

## 新入団員の感想

牧田 寿賀子（団員：アルト）

「日本語でマタイを歌いませんか」と、田中玲子さんが誘ってくださり、それならカンタータも歌いたい、と1月から入会しました。3月のボンヘッファー記念集会で歌った192番のカンタータはとてもいい曲で、大好きになりました。それに記念講演にも大きな感銘を受けました。

今回の曲目、第180番、187番、194番、どれもとても魅力的でした。最初はむずかしかった曲が、くりかえし練習するうち楽しく浮き浮きする気持ちで歌えるようになりました。といっても、194番はまだ私にはむずかしいところが何ヶ所もあり、演奏会でも間違えましたが…。日本語の歌詞が最初から付けられていたかのように、どの曲にもびったり合っていて、心をこめて歌うことができました。

聴きに来てくれた友人たちも、まとまった良い演奏だった、プログラムの日本語の歌詞を見ながら聴くと、思いが伝わってきて、日本語で歌う意味もわかったような気がする、と言ってくれました。

これからのマタイの練習もとても楽しみです。以前に別の合唱団でマタイを歌ったのをきっかけにドイツ語を習いはじめて7年、今も根気よく語学学校に通いつづけています。歌も語学も、つづけてさえいれば、なんとか現在の力を維持できる、あるいは少しは上達も望めるかもしれない、と考えてこれからもやっつけていこうと思っています。先生をはじめ、10年以上も先輩の方々が元気で歌っておられるのは頼もしいかぎりです、励みになります。

前田 千圃（団員：アルト）

「日本語でマタイを歌わない？」と田中玲子さんに誘われたのは昨年12月でした。バッハを日本語で歌うという、想像もつかないことに興味がいっぱいにふくらみ、1月には「ぜひぜひお願いします」と、世田谷中央教会での土曜の練習に初めて参加させていただきました。

手渡されたカンタータの楽譜4冊。「えっ？これ、きょう練習するの？」と尋ねる間もなく、大村先生のご指導が始まりました。伴奏部分から軽やかなリズムがきざまれ、初見でほとんど歌えていないのに、気分はもう一人前の合唱団員になっていました。あっという間の2時間でした。

家で必死にピアノをたたき、音取りをして臨んだ月曜日は少しだけ歌うことができ満足でした。

毎回、先生が曲を最後まで歌わせてくださるので、音楽が自然に体の中にはいり、自分の出来ていないところが良くわかり、その部分を練習することができるので、とてもありがたかったです。

宗教歌曲 死よ来よ、憩いよ の録音、信濃町教会での演奏、そして定演の舞台に立たせていただき、本当に幸せです。

## 第99回定期演奏会

### 会場アンケートより

今回も多数のご意見・ご感想をお寄せいただきました。その中から、いくつかをご紹介させていただき、今後の参考にさせていただきます。ありがとうございました。

・東京バッハ合唱団の存在を初めて知り、初めて聴き、感激しました。カンタータを日本語で聴き、すばらしいと思いました。

・日本語のバッハも良いものですね。《マタイ》もきいてみたい。

・[バッハの日本語演奏は]まったく違和感がなく、これが本当たと心から思えた。

・カンタータを久しぶりに（それもライブで）聴き、良さを再認識しました。

・年に2回の定期演奏会を、いつまでも続けていただきたく思います。

・BWV180：第2曲のフルートのメロディと、ファゴット、オルガンのリズムは、とてもすばらしい。

・BWV187：すばらしい出来で、うれしく思いました。ことに冒頭合唱の迫力と、橋本さんの指揮ぶりで、この合唱団への心配（みなさんのご高齢）もなくなりました。

・BWV194：最後のカンタータが圧巻でした。オーボエの熱演、第9曲（ソプラノ/バス）のレチタティーヴォなど、とても快かった。

・みなさん、とても楽に歌っていて、かつ深く理解していらっしゃると感じました。ハーモニーのバランスがとても良く、いっしょに行った合唱団の友人もしきりに感心していました。

・合唱の日本語、たいへんきれいでした。

・良く練習されており、美しいハーモニーでした。

・エンジェルの声のようでした。うきうきした幸せな気持ちになりました。

#### アンケートで《マタイ受難曲》演奏会へのご招待

今回の演奏会場アンケートでは、お寄せいただいた方の中から20名様を、《マタイ受難曲》公演（2007年3月21日、杉並公会堂）にご招待させていただくことにしました。

ご回答は全部で72通でしたが、ご住所をご記入くださった53名の方の中から抽選のうえ、本年10月末までにご招待状をご郵送申し上げますので、楽しみにお待ちください。

ご協力ありがとうございました。

清水 佐智子（後援会員）

第99回の演奏会、とても感動的でした。

この演奏を神様にお捧げしますという先生のお心がひしひしと伝わってきました。

日常の一つ一つの仕事を、私も心を込めて神様にお捧げしてゆけたらと思ったことでした。ご祝福を祈りつつ。

## 西南学院 90 周年に

### カンタータ第4番の日本語演奏

「カンタータ 50 曲選」の楽譜で

渡邊 均

（西南学院大学・人間科学部児童教育学科）

東京バツハ合唱団主宰 大村恵美子様

拝啓 時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さてこの度、6月2日（金）に行われます西南学院90周年記念演奏会におきまして、貴団体において出版されました「日本語演奏によるバツハ・カンタータ」を採用させていただき、カンタータ第4番《キリスト 死に繋がれしが》をプログラムの中で演奏させていただくこととなりましたのでご報告申し上げます。

貴団体の活動には以前から大変関心を持たせていただいております。またさらには「50曲選」は、出版当初より図書館で取り寄せ収蔵させていただいておりますが、以前から演奏として実現する機会はないものかと、機会をうかがっておりました。そうしましたところ、今回、学院のOB・OGや学生・教職員と演奏する機会を得ることができましたので、是非にと思い提案させていただきました。幸いなことに承認され、これまで準備を整えてまいりました次第です。

讃美歌を歌う営みは、本学院においても永い間まもられてきておりますが、バツハのカンタータ演奏の機会はいまだにはあまりなかったようです。これからは、日本語による演奏を導入として、カンタータを歌う機会を増やしてゆきたいと考えています。

演奏会は、無料公開の演奏会です。バツハについては初心者集まりではありますが、100周年に向けての第1歩としてスタートを切りたいと思っています。

大村恵美子先生のお仕事に感謝しながら進んで参りたいと思います。

敬具

## 受難曲と美術作品

### カヤパの審問

白木 博也（画家・後援会員）

カヤパの前に引き出されたキリストは、彼の審問を受ける。



ドゥッチョ・ディ・ブオンセーニャ (1255/60-1315/18)  
イタリア・シエナ、ドゥオモ付属美術館



ジョット・ディ・ボンドネ (1266-1337)  
イタリア・パドヴァ、スクロヴェーニ聖堂

### 場面のテキスト

<そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った。「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は今、冒瀆の言葉を聞いた。どう思うか。」人々は、「死刑にすべきだ」と答えた。>（マタイ 26.65-66）

## 《マタイ受難曲》演奏会 新規参加者

第99回定演が終了し、5月15日（月曜日・目白）と20日（土曜日・桜新町）から、さっそく《マタイ》の練習が本格化しています。

すでに年明けより、3名の方が新規に入団なさったり、団員に復帰なさったりで、《マタイ》の準備にもとりかかっていましたが、今月は、新たに下記の18名の方が正式に入団の手続きをなさって、練習に加わりました。

参加の意志を表明されている方が、まだ何人もいらっしゃいますので、来月以降も新入の団員を、つぎつぎとご紹介できると思います。

これからの参加も、まだまだ間に合いますので、ご希望の方はいちど見学にお越しください。

### 新入団員（5月）

#### <ソプラノ>

神田弘子さん（元団員）  
高濱朗子さん（元団員・旧姓川瀬）  
村松政子さん（元団員）  
八巻香代子さん（98回定演チラシを見て）  
渡辺才枝子さん（団員の紹介）

#### <アルト>

池田孝子さん（新聞を見て）  
石田美保子さん（後援会員・元団員）  
大庭三恵子さん（元団員）  
金子友子さん（団員の紹介）  
菊池安子さん（元団員）  
定政典子さん（団員の紹介）  
関根佐智子さん（団員の紹介）  
本田節子さん（後援会員・元団員）  
真鍋孝子さん（99回定演チラシを見て）  
三好泰子さん（元団員）

#### <テノール>

澤田 望さん（後援会員・元団員）

#### <バス>

菅間五郎さん（団員の紹介）  
野本哲雄さん（99回定演チラシを見て）

### 6月の練習予定と行事

日	曜	時間	会場	内容
3	土	15:30 - 17:30	世田谷	通常練習
5	月	18:30 - 20:30	目白	通常練習
10	土	15:30 - 17:30	世田谷	通常練習
12	月	18:30 - 20:30	目白	通常練習
17	土	15:30 - 17:30	世田谷	発声指導（渡辺先生）
19	月	18:30 - 20:30	目白	通常練習
24	土	15:30 - 17:30	世田谷	団員総会
26	月	18:30 - 20:30	目白	創立記念懇親会

## バルラッハ展と上野界限散策

大村 恵美子

月報5月号の小海 基 牧師の文章でエルンスト・バルラッハ展が紹介されたことから、周辺に、ちょっとしたブームが起きました。バルラッハは、ドイツに住んだことのある人々には親しい芸術家ようですが、まとまった数の作品がわが国に紹介されるのは今回が初めてで、大きな評判となりました。

私も、せっかく推奨しておられるのを、写真でも掲載しなければと思い、ほんとうにギリギリのタイミングでしたが、5月13日の定演会場での配布に間に合うようにと、小海氏におねだりして2つの作品の写真図版を送っていただきました。

12日のゲネプロで、出来上がったばかりの月報を演奏者にお配りしたら、アルトの佐々木まり子さんがさっそくいらして、「けさ盛岡から上野に着いて、バルラッハを見るために芸大美術館に直行したんです。ドイツ留学時代から大好きだったものですから。いま月報に載っているのをみてびっくり」と言われたので、私からお願いして、すぐ団員のみなさんの前で、そのことを伝えていただきました。

すると、翌日の演奏会当日、午後早々にステージ練習があったのですが、数人の元気な団員の方々が、午前中の中を展覧会場まで行って来たということで驚きました。ドイツ演奏旅行のとき、いつも、早朝とか、夕方ホテルに着いたとたんに、部屋を飛び出して街にむかう団員たちが絶えなかったことを思い出しました。過密なスケジュールの旅で、ほとんど毎日の夜にあるコンサートやイベントをこなすのに、体調にさすつかえないのかと危惧したりもしたことを、この定演当日にも感じたのですが、こういう時は精神も昂揚しているらしく、むしろふだんよりいっそう芸術活動に入ってゆけるらしく、大成功の結果となりました。

その後も、ずいぶん多くの方々がバルラッハのファンとなったのではないかと思います。

さて、私も定演の数日後に再訪しました。ずいぶん昔に、往復いろいろな想いで通った道ですが、当時は今もけっこう駅から遠く、雨の日などはちょっと苦労ですが、この日は大発見をしました。「東西めぐりん」という、古風な車体の区営バス（台東区）の路線が新しくできて、上野駅の公園口とか、芸大正門前とかにバス停があるのです。100円で乗車でき、間隔も15分間おき。浅草と千駄木を東西に結んで、なんと上野学園（石橋メモリアルホール）もコースにありました。ただし時計周りの1方向循環なので、利用には研究が必要です。これで美術館の前後に、上野界限の散策が、いちだんと楽しめることでしょう。皆さんも、これからは、いろいろ工夫されてみては、と思い、バルラッハ展の副産物としてご紹介しました。